



スタンダードも愛したコモ湖畔の5ツ星ホテル前をパレードする400GT 2+2。1966年ジュネーブ・ショー展示車両であるという。最初のオーナーはイタリア人だったが後年米国に渡り、1993年にフルレストアされた。

ハイグレードなおタク発見

文と写真 大矢アキオ

ボクがSUPER CGの駆け出し編集部員だった1991年のことである。デビュー直後のメルセデスSクラスW140に試乗するため、当時上司だった小林彰太郎氏とともにシュトゥットガルトに赴いた。

メルセデス・ミュージアムの片隅にショップを見つけたボクは、ミニカーやら複製版カタログやらを買い求めようと血眼になった。ところが、小林氏はまったく動じない。上司が待っていてくれるのだから恐縮しなくてはいけないのだが、そこは社会常識を知らぬ新人。逆に「小林さんは、お土産とかいいんですか？」と訊いてしまった。すると氏は「ボクは1/1しか興味がありませんから」と平然と答えた。

1/1とは本当のクルマのことで、つまりミニカーには関心がない、ということである。そのときのボクは、「究極のエンズージャストって、厳しいもんなんだなー」と思いつつも、おタク・スピリット全開でメルセデス・グッズを買い漁ったものだ。

さて先日4月21日、コモ湖畔ヴィッラ・デステで行なわれた有名なコンクール・デレガンスでのこと。今年はコンセプトカーを含む66台が9つの部門に分けられて参加した。

そのひとつ、『イタリアン・スタイル』の1台に、1966年ランボルギーニ400GT 2+2がいた。

一般的にこうしたイベントといえば戦前車が半分を占め、戦後車もフェラーリがスターである。事実、その日も

『50年代のフェラーリ』と題したカテゴリが設けられ、全体では9台がリストに並んでいた。なのにランボで参加とは、ご奇々な方だ。

傍らにいるオーナーをつかまえると、米国人だった。

彼いわく、フェラーリは「平凡」、400GTは「ミウラよりエレガントで、スタビリティがいいよ」。

オリジナルのままのステアリングホイールなど、彼が指

し示すチャームポイントをひとつお見せしてもらったあと、立ち去ろうとしたときである。彼がトランクを開けて手招きする。

中を覗くと、当時のカラーカタログや部品カタログなどが、筆筒の中の衣類のごとく整然と並べられているではないか。

オーナーの顔は誇らしげに輝いていた。

もちろん、クルマの歴史を示す資料も含まれているから、審査員へのプレゼンを意図したものであろう。

しかしながら、「トランクやハッチを開けると、またまたそのクルマのミニカーや写真が出てくる」というマトリョーシカ展示法((C)大矢アキオ)は、日本の村興し古典車イベントでもみられる伝統的手法である。

不躰な呼称をお許し頂ければ、そんなちょっとおタクなディスプレイを施すオーナーが、78年の歴史を誇る由緒正しきコンクールにも“潜伏”していたとは。グッズ系のボクとしては、妙に嬉しかったのであった。



トランクには取説、車両&部品カタログ、メーカーでもらった手書きのシャシーナンバー一覧などが。型式認定車両であることを地元陸運局に証明する証書は、ランボがまだ“カルトブランド”であったことを彷彿とさせる。